

〔資料紹介〕

狩野素川彰信筆「江都四時勝景図巻」

*我妻直美

はじめに

日本画の伝統的な画題に「月次風俗図」というものがある。江戸東京博物館にもいくつか所蔵されているが、ここで紹介する「江都四時勝景図巻」は質・保存状態ともに良好で、江戸の「月次風俗図」としての情報量が豊富であること、さらに制作事情がはっきりしていること、この二点において傑出した存在である。これまでも概要の紹介や、部分的な情報の報告はなされてきたが、残念ながら総合的に紹介されることがない①。従って、改めて全体像をここで紹介し、「江都四時勝景図巻」の美術的・歴史的な価値を明らかにしたい。

一、「江都四時勝景図巻」の基本情報

名称…「江都四時勝景図巻」

えどしじしよけいずかん

絵・詞書・附記

かのうそせんあきのぶ
狩野素川彰信（一七六五～一八二六）

乾巻題辭

まつだいらあきのぶ
松平定信（一七五八～一八二九）

坤巻和歌

まえたどつよ
前田利幹（一七七一～一八三六）

題箋・内箱蓋箱書

いらかわべいあん
市河米庵（一七七九～一八五八）

内箱蓋裏箱書

かもすえたか
賀茂季鷹（一七五一～一八四一）

外箱蓋裏箱書

おおたきんじよ
大田錦城（一七六五～一八二五）

外箱蓋覆紙

不詳

制作年月…文化十三年（一八一六）八月

員数…乾・坤の二巻

法量…乾巻 三三・七cm×一一・二・〇cm

坤巻 三三・七cm×一一・六七・七cm

材質…絹本着色

内容…一月から十二月まで、各月にひとつの江戸の年中行事をテーマにかかげ、詞書きと絵によって構成した「月次風俗図」の一種。乾の巻に一月から六月まで、坤の巻に七月から十二月までが取りあげられている。絵巻は、黒漆塗りの外箱、そして桐の内箱と、ふたつの箱によって二重におさめられている。

①乾巻（図1）
1 「江都四時勝景図巻」の詳細

*学芸員

【題箋】

「江都四時勝景図巻 乾」

【題辭】

「以是画史」 朱文方印「花月」「(不明)」

【一月】

(詞書) 「十二月行事略記」

列侯登城

江戸の大城は 後花園院の御宇大田氏

道灌豊島郡江戸莊千代田寶田等の村落を

城地とし長禄元年丁丑歳に其功を竣たり。

其後天正十八年庚寅のとし小田原没落して

江城 神祖に属し奉りてより今の大城

を新営ましますとなり。寛正年の地図を按るに

今の大城の地はいにしへの横山村なり。豊島郡に

隸たり。其はしめ長禄元年四月八日に江城

巧匠の功成就せる時に京師五山の萬里和尚

古詩を引てこの地を祝称せり。此地必ず繁華

たるべしといえり。其詩に云。窓含西嶺千秋雪

門繫 東呉萬里舟。萬里和尚の言正に相符号せり。

今にあたりて三百列侯歳首登城は日下ひるひなし。

実に昌平無疆の盛賀とひふべし。」

(絵) 元旦に諸大名が江戸城に登城し、將軍に挨拶をする。登城し

た大名達が集まる江戸城の大手御門付近を描く。画面右下に

「原明」の朱文瓢印あり。

【二月】

(詞書) 「三圍山倉稻魂神の祭」

三圍山真珠院延命寺兼帶小梅の鎮坐葛飾

郡に隸す。其創建はいまた詳に考す。元禄年の

比既に参詣の輩神供をさゝくる事あり。其後

江戸駿河町の帛商三井某か由縁あり而享保

八年癸卯のとし再建して清社となせり。此御神

山城國伊奈利山に現ましまして五穀豊祭を

護給ふなり。乃ち稻荷はその地名に好字を鎮

たると。祭禮二月はしめ午日。」

(絵) 隅田川東岸沿いにあつた三圍稻荷社(神社ともいう)の初午

の行事をとりあげる。土手の際に二本の幟の立っている鳥居

が見えるが、ここが三圍稻荷神社。岸边には竹屋ノ渡がある。

左の方の鳥居は牛鳥神社。画面右下に「原明」の朱文瓢印あ

り。

【三月】(口絵7)

(詞書) 「東叡山櫻花」

東叡山寛永寺圓頓院は台宗開基天海僧正



2月

1月



4月

3月



6月

5月

図1 「江都四時勝景図巻」 乾の巻〈87200522〉



8月

7月



10月

9月



12月

11月

図2 「江都四時勝景図巻」 坤の巻〈87200523〉

即慈眼大師也。後水尾院寛永年中草建。

比叡山延暦寺をうつし給ひて大城の鬼門を

まもり天下泰平の御祈願所なり。その壮儼は

図よりゆふもかしこし。山中の桜花三月爛漫。その

品種も数等あり。江戸賞花第一の奇観奇

絶を極めたり。」

(絵) 上野の山の花見を描く。画面左から黒門、山王社、清水観音

堂、下馬札、文殊楼、時の鐘と横長に展開する。画面右下に

「原明」の朱文瓢印あり。

【四月】

(詞書) 「日本橋の堅魚時鳥

日本橋は大江戸の中央なり。はしの長南北凡

二十八間。夕々の入船罷時なし。朝々の魚市其繁昌

この地に逾る所なし。就中時鳥のふりはえ啼わたる比は

堅魚の貴きこと衆魚の及どころにあらず。また

漁舟の競ひも他魚の運送とハことに異なりけり。

さて延喜の式に堅魚腊とあるは今の堅魚節なるへし。

堅魚煎汁とあるは今のそくに云煮取なるべし。是は

供御にも備えしことなるへし。兼好法師か呼て毒魚

といえるは生魚をさしいふなるか今は即其鮮

魚を貴て鯛鱸に輸たり。」

(絵) 日本橋の魚河岸の賑わいを、橋の南側から描く。遠くに富士

山と江戸城を望む日本橋の上に、ほととぎすが1羽飛んでい
る。画面右下に「原明」の朱文瓢印あり。

【五月】

(詞書) 「柳島初秧

葛飾郡柳しま十間川妙見山法性寺ハ真間

山末法華宗也。境内に妙見堂あり。此菩薩

蓋し驗應ありて年ごとに信仰の儔いよく

おほく堂宇壮麗也。祭禮六月十五日。堂前

の古松蜿々大々として夏月曠蔭あり。其南

北の水田萬畦初秧の翠緑いとめてたし。凡

稲田はうゑそめてより六十日にして収むるを

はやしと云。」

(絵) 画面右半分は、柳島の法性寺の、妙見大菩薩界隈の田圃風景。

植えたばかりの苗に梅雨の雨が降る。通称、妙見様は正月、

五月、九月の一日と十五日に開帳があり賑わった。画面左に

大きく描かれる松は、「影向松」といって本尊が降りたと言わ

れる霊樹。画面右下に「原明」の朱文瓢印あり。

【六月】(口絵8)

(詞書) 「兩國橋納涼

兩國はしは萬治年中にはしめてかけわたす

といえり。橋の長九十六間。舊は大橋といえり。

後に今の名に改給えり。浅草川はむかし武蔵
下総両国の介なるにより橋の名にも負せる也。

今は葛飾郡を武蔵に隸し給へる也。浅草川の
清流は夏月納涼の勝境也。夜は千舟萬燈殊に

火戲商船絲竹管絃河上に動揺し兩岸の酒肆
茶麩其繁錯他國にたくひなし。」

〔繪〕 両国橋の上流西岸からみた納涼風景。手前に難波橋（元柳橋）

を中心に岸辺の風景を描き、対岸に堅川と一ツ目之橋が見え
る構図。納涼の船は出ているが、花火の上がる夜景ではない。
画面右下に「原明」の朱文瓢印あり。

〔乾卷末 素川落款〕

〔原明〕（朱分瓢印）

〔文化十三丙子中秋狩野大玄斎筆〕「狩野」（白文方印）「狩川
印」カ（朱文壺印）

②坤卷（図2）

〔題箋〕

「江都四時勝景図卷 坤」

〔7月〕

「新吉原燈籠

むかしハ遊女街の定なし。元和三年丁巳のとし

三月傾城町を一ヶ所に定められ今の堺町のわたり
にて二町四方の地を給ひけるとぞ。此所ハ蘆
萩の沼なるかゆゑにあし原といふへきを祝ひ
ことふきて吉原の好字をゑらみたりといふ。

五町全く建並ひたるは寛永三年丙寅のとし
十月九日なりといふ。明暦三年丁酉のとしに今の所へ
移されたれは新よし原と云といえり。この地もとハ

瀧泉村也。今吉原の西北に瀧泉寺あり。さて吉原

の燈籠ハ六月晦日より七月晦日まで中の町茶屋毎
禽獸花草を設て燈火をともし娼門の壯觀と
なりぬ。中元に燈火を前にまうくることは

後堀川院の御宇寛喜年の前後に起り今に
いたり相承て故事となす。又藤原定家卿

の明月記をみるに寛喜二年七月十四日近年

民家今夜長竿を立て其末梢に燈楼物の
如きを付紙を張燈を挙遠近にこれをつくる。

年を遂て其数おほし。流星人魂に似たりと
みえたり。按に今此遺制ハ荏原郡矢盛庄

青山のわたりにのみあり。」

〔繪〕 新吉原が六月末から七月末まで燈籠を飾って賑わう様子を描

く。日本堤から入口の高札場、見返り柳を経て、大門から入
る構図。軒下に燈籠が下がり、店先に飾り物が並ぶ。画面右
下に「原明」の朱文瓢印あり。

【八月】(口絵9)

(詞書) 「高縄望月」

今の高輪は「寛正地図」に高縄につくる。

高縄も高縄手の下略也。むかし高縄か原といふハ

芝田町今の高輪白金臺町二本榎品川

大井村のわたりまてをさしての惣名なり。

北條氏綱・上杉朝興合戦ありし所也。さて八月

十五夜に月を賞観せしは李唐の世より盛に

して玄宗皇帝八月十五日夜楊貴妃と大液池

にのそむて月を見ける時に蘇隨・李封など、

いる人の禁中にて此夜文酒を催す。本朝ニ而ハは

嗟峨天皇御製に明月年々不改色看人歳々

白髮生。「續古今集」に天鴈の御歌に月ことに

見る月なれとこの月の今宵の月に似る月そ

なき。兼好法師か「徒然草」に八月十五日九月

十三日は婁宿なり。此宿清明なるかゆゑに

月をもてあそふに良夜とす。また按るに月は

水の精也。秋は金の氣也。金水性相生五行。其

事を分れハ則ち天地の相感すること各類を

もて水ハ金を得て盛也。月ハ秋に因て更に清し。

是等の説月を翫の正意なるべし。」

(絵) 海に面した高輪界限での仲秋の名月の様子を描く。手前に大

木戸の土塁、画面左側の海上の空に満月が見える。画面右下

に「原明」の朱文瓢印あり。

【九月】

(詞書) 「神田神社の祭」

神田神社に齋神は 大己貴命なり。今の地ハ

即湯島なり。はしめは神田橋内にありしを

元和二年丙辰のとしにこゝに移し給へるなり。

神代記に大國主神を国作大己貴命と号し奉る

よしミへたり。是 本朝の地主神なり。祭禮

九月十五日。神事能の事ハ「落穂集」にくわしく

ミえたり。此末社に午頭天王三社あり。これ則

当社の地主神なりといえり。毎年六月五日七日

十日旅出の祭禮あり。さて羅山先生「神社考」

白井宗因「神社啓蒙」等に平将門の靈を祭ると云。

是よりして群書皆将門の靈社となすは違へり

けり。また或ハいふ。神田に祭る神ニ坐左殿は

大己貴命右殿は将門の靈なりといえり。詳なる

ことは荒井嘉敦神社畧記等にみえたれば

尚尋ぬへし。」

(絵) 隔年の九月に行われた神田明神の祭礼の行列が、筋違御門を

抜けたところを江戸城側から描く。画面中央の橋は昌平橋で、

ちょうど山車の後ろに神田明神の鳥居と屋根、その左には湯

島聖堂の本堂の屋根が見える。画面右下に「原明」の朱文瓢印

あり。

【十月】

(詞書)

「 玄猪登城

「達生録」云。十月亥日餅を食て病を卻 「政事

要略」に「群書隆集」を引て云。十月亥日餅を食て

万病を除と有。今按るに 朝家亥日餅を

以て玄猪と名つく。上古ハ十月猪肉を用ひし

意これにちかし。書紀に 崇神天皇十月

丙子山猪を献すること有とみえたり。今列候

の登城もけたしこ、にもとつくならん。この夜

大手・桔梗の両 御門外にかゝり火を焚せ給ふも

必故実あるへし。其燎炎人の眉毛を弁すべし。」

(絵)

十月亥の日の將軍拝謁を終え、桔梗門を通過して大名が帰って

いく下城風景を描く。行事の一環である焚き火が中央に燃え

ている。画面右が桔梗御門（内桜田門）で、背景は右から寺

沢槽、蓮池巽槽、蓮池二重槽となる。画面右下に「原明」の

朱文瓢印あり。

【十一月】

(詞書)

「 両町戯場

中村勘三郎か芝居は寛永元年甲子のとしに

歌舞伎芝居をねかひて中橋に建。市村

宇左衛門か芝居ハ寛永十年癸酉のとしに村山
又三郎歌舞伎芝居をねかひ村山九郎右衛門と
云名題にて市村宇左衛門彦作座元なり。

後に今の葺屋町・堺町へうつさるゝ也。事は

詳に野叢談江戸砂子等にミえたり。十一月

朔日に顔見せとて場を開きしハ其創業の

時の所因に倣たるなるへし。」

(絵)

葺屋町堺町の芝居町界隈の風景。日本橋の方を背にして、堀

を越えるかたちで芝居町の賑わいを描く。右の橋は親仁橋で、

駕籠を囲んで大騒ぎをしている一団がいる。画面右下に「原

明」の朱文瓢印あり。

【十二月】

(口絵11)

(詞書)

「 浅草市

金龍山浅草寺伝法院は寛永寺末なり。

当寺に安し給へる観音大士の霊像は

推古天皇三十六年戊子のとし三月十八日進中

臣といふ人の臣檜熊・浜成・武成といふ三人の兄弟

宮戸川の洋に網を張ける時其霊像あみの

中にかゝりて現れたり。はしめ草庵を結びて

安置しけるか毎に大慈の驗應ありければ

誓願日々おほく 朱雀天皇の御宇天慶

五年壬寅のとし平公雅武蔵守たる時に

其堂を建て彼の霊像を安置しけるに

「信仰増おほく人迹絶ることなしといえり。

されと今の輻輳轟然たるにして時あらん。

毎年三月十八日糞市あり。正に霊像出現の日に

よるなるへし。糞ハ即漁者腰みの、縁によるか。

また十二月十七日十八日の市とて終夜とも

正月のまうけの具を売なり。惣て市ハ人の

會聚する所に商子のあつまるをいふなり。」

(絵) 雪景色の浅草寺年の市を描く。隅田川沿いの駒形堂の賑わい

を中心として、参道が左へのび、浅草寺の雷門、仁王門、本

堂の屋根が遠くに見える。画面後方に小さく見える橋は吾妻

橋。画面右下に「原明」の朱文瓢印あり。

【和歌】

「東路の名所

おほき

うつし絵は

いく万代も

かきりなく

見む

利幹」

【坤巻末 素川附記】

「原明」(朱文瓢印)

「附記

この十二月行事の図は森川氏需に応して

みつから製する所也。事の序なれば名勝及

神社の事聊我としなみ見聞する所の

暗記をしるして巻尾に書付んよるなり

事のたかへるはみる人尚改給へ。我もとより

神事地誌の学に望されは徒に筆をぬらすのみ。

狩野素川藤原彰信書画」

「大玄齋」(白文方印)「藤原彰信」(朱文方印)

2 箱等の詳細

【内箱蓋箱書】

「江都四時勝景図 二軸」

【内箱蓋裏箱書】

「ます鏡 うつれはかはる 一歳を

手にとりて見る 是の

うつし画

季鷹」

【外箱蓋裏箱書】

「狩野素川所画江戸名勝図二卷森川氏所蔵

也城郭御衛之壯麗神祠佛院之雄佛及士

民四時嬉遊之樂可坐而觀矣是亦臥遊之具也

樂翁老公跋其首戸山菅公以和歌跋其尾可謂

三絶矣是亦一時之鳴寶也森川氏富冠千城

壯然不寶珠玉而寶書画是亦一世之所希觀

也豈不亦佛乎

文政二年巳卯猛秋錦老人識「元貞」（白文方印）

【外箱蓋覆紙】

「序 白川少将楽翁源定信公

末 富山侍従菅原利幹公

狩野素川筆

江都四時勝景図 二軸

表題箱書上書 市河三亥書

十二月行支略記 狩野素川書

内宮和歌 賀茂季鷹

外箱裏文 太田才介

二、「江都四時勝景図巻」の特徴

1 「月次風俗図」としての位置付け

「江都四時勝景図巻」は、はじめに述べたように「月次風俗図」の一種である。「月次風俗図」とは、一年間のそれぞれの月や季節

の年中行事を取りあげて描いたもので、一月から十二月まで、各月に一画題をあてはめて完成させたものが多い。しかしこの絵巻には、多くの「月次風俗図」とは異なる大きな特徴がある。

一点目は、描かれている十二ヶ月分の行事や土地が、江戸のどこを描いたものか、どのような年中行事もしくは季節の風物詩を描いたものか、全て特定できることである。

以前から筆者は「月次風俗図」、とりわけ「江戸の」月次風俗図（以下、「江戸月次風俗図」と称する。）というものに関心を持ってきた。「江都四時勝景図巻」を理解する一助として、これまで筆者が独自に使用してきた「江戸の」と区別する基準を掲げると次のようになる。①描かれている行事が江戸固有のものであること ②江戸幕府の行事が入っていること ③江戸名所など、江戸の土地が描かれていること ④明らかに江戸の風俗を得意としている絵師が描いたものであること ④の四点である。この基準にのっとって「江都四時勝景図巻」を眺めれば、本絵巻が題箋に違わず、「江戸月次風俗図」の基準を十二分に満たしていることがよくわかる。

しかし実際は、本絵巻ほど「江戸」という地域性を前面に押し出した「月次風俗図」は極めて少ない。以前筆者は二十点以上の「江戸月次風俗図」を年代順に並べた上で、月ごとの画題を整理・分析したことがある⁽²⁾。その結果、一年十二ヶ月に描かれた行事の場所が江戸のどこかはつきりわかり、且つ具体的な行事名や事象が確認できたのは、管見の限り本絵巻以外に該当するものは無かった（いささか制作意図が異なってくるので全てを同列には考えられな

いのであるが、版本まで対象を広げると享和四年（一八〇三）の歌川豊広画『絵本東童郎』一点が確認できた。他のものは一年のうちの数ヶ月分、たとえば王子稻荷の初午、上野の花見、隅田川の花火、高輪の月見、芝神明の生姜市などによって、「江戸月次風俗図」とわかる程度である。それでも時代がくだるにつれて、江戸初期には無かった新しい江戸の名所や行事を織り込んでいくという工夫はなされており、十二ヶ月全てが江戸のものの特定できなくとも、「江戸月次風俗図」とみなしうる内容となっている。つまり、普通に「江戸月次風俗図」を描くのであれば、数ヶ月分だけ江戸の個性を出せば十分事足りたわけである。それにもかかわらず、この絵巻が曖昧な画題を許さず、毎月毎月徹底的に江戸の行事と土地を描いていることが、逆に大きな特徴となってくるのである。

二点目は、丁寧な詞書の存在である。詞書と絵で構成されている絵巻物は日本の伝統的な表現方法のひとつであるが、物語絵ではなくて「月次風俗図」という画題において、このような体裁をとるものは珍しい。元禄四年（一六九一）の菱川師宣画『月次のあそび』や先述の『絵本東童郎』等、版本なら絵と説明文という構成もままあるが、肉筆画でこのような構成は見当たらない。

またさらに詞書の内容も絵に描かれた行事や場所の故事来歴を検証するような、大変折り目正しいものとなっていることも目をひく。ひとつひとつ、江戸の初期にまで溯るか、あるいは古典の世界にまで視野を広げて各月の行事や名所に関する歴史を語っている。かつて新興都市江戸は、語るに足る歴史を持った名所は数カ所しか無か

った。せいぜい隅田川や梅若塚くらいである。それが今では、振り返ることの出来る歴史やちょっとした話題を有する場所として、江戸独自の年中行事の舞台として、十二ヶ月分の名所を揃えられるまでになったことが本絵巻の詞書を読むとよくわかる。本絵巻の詞書は、一種の風俗画であるこの絵巻を楽しむためというよりも、江戸の行事や名所をより深く理解すると同時に、江戸の歴史をも知ることが出来る内容となっているのである。

そして三点目としてあげておきたいのが、「江都四時勝景図巻」全体にみられる質の良さ、品の良さ、ということである。当絵巻を語る上でこの点を軽んじるわけにはいかない。

質の良さは、まず絵に使われている絵の具の発色の美しさや、金泥を二種類使用している点など随所にうかがえる。絵の具はどの色も冴えており高価なものが使われていることがわかるし、金泥は二種類の色を効果的に使い分けて画面に趣を与えている。また詞書の書かれている料紙も、二種類の金泥によって季節の草花や樹木、そして横線や波線の模様が美しく描かれており、とても丁寧な仕上がりととなっている。さらに料紙の図柄を見ていくと、興味深いことに一月から二月へ、二月から三月へ、と図様が繋がっており、詞書の料紙はもともと連続したものであったことがわかる。但し七月と八月の間だけは図様の継続性が無く、きれいに花模様が途切れているので、恐らく詞書の料紙は二枚用意されていたと思われる。ただし料紙に描かれている植物は四季それぞれ二十三種ほどになるが、季節に関係なくばらばらに配置されているので、料紙に描かれた植物の

季節と絵巻の画題の季節を一致させる意図は無かったと考えられる。

品の良さは、「江都四時勝景図巻」が、庶民の風俗をたくさん描いているにもかかわらず、そこから発せられる空気に全く人々の汗の臭いや埃の臭いが感じられないということにある。たとえば、七月の吉原の風景には遊里独得の猥雑さはみじんも感じられないし、十一月の顔見世の賑わい振りも、静かな町中のごく一部の騒動を描いたようにしかみえない。

理由はいくつか考えられるが、まず描かれている人間がかなり小さいことであろう。一人一人は丁寧に描かれているものの、画面全体からみるといかにも小さく、数も少なく見えてしまう。これによって画面全体から人間の臭いが薄まってしまっているのである。さらに人物表現自体が、いずれも野卑などころの無いすっきりとした容顔で描かれている。由緒ある狩野派の表絵師、浅草猿谷町代地狩野家の当主が描いただけのことはある。次に各年中行事の背景となった場所や地域に対する、大変生真面目な描写態度がある。風俗描写に気を取られることなく丁寧にその土地の特徴を捉えた表現は、堅実で客観的なものを感じる。たとえば大名が登城する行事がふたつ描かれているが、背景となる江戸城の堀や櫓や門等の建築物の様子は少々退屈なくらい正確であるし、三月の東叡山は建築物もさることながら下馬札もきちんと描かれている。中でも驚かされたのは九月の神田明神の祭礼を描いた部分である。画面上部に描かれた霞の上から小さく見えるのは神田明神の鳥居と湯島の聖堂の屋根であ

るが、画面右に大きく描かれる筋違御門との地理関係を上手く処理した上で、祭礼の主役である神田明神の社をその山車の背後に描き、さらに湯島という土地を代表する聖堂の屋根をちらりと見せる。この構図は、この土地の性格、行事の意味をきちんと理解した者の表現であるといえよう。これは、先にも述べた検証的な詞書の姿勢とも共通するものである。

さて最後に四点目の特徴として、本絵巻の一面面が、通常の絵巻の画面に比べてかなり横に長いということを指摘しておきたい。通常鑑賞に適した絵巻の一面面の長さは、だいたい成人が両腕を普通に開いて広げられる範囲と言われているが、この絵巻はそれよりもはるかに一面面が長い。それを最大限利用して特定の場所を描いているのである。四月の日本橋の場面などは、横に長く展開できたからこそ、川沿いの魚河岸の様子から日本橋、その袂の高札場、そして遠く江戸城、富士山までを描くことが可能となった。七月も、新吉原に至る日本堤の長い道を描く余裕ができたし、八月の高輪望月では、月明かりに満ちた高輪の海を情緒たっぷりに表現することができた。これは、江戸という都市の場所や地域、年中行事に対する表現意欲が非常に高い制作者が、あえて画面を横に長くとることによって、年中行事の舞台となった各名所を正確に描こうとした結果と考えられる。しかしこれによってもたらされた空間のゆとりが、画面全体にゆつたりとした空気をもたらすことになり、これがまた品の良さへと結び付いているように思われる。

「江都四時勝景図巻」は、「月次風俗図」というジャンルに含ま

れるものでありながら、その風俗図の命である俗人的な臭いを極力薄め、その代わり江戸の名所と行事を絵と文章で正確に写し取ることに力を入れた結果、独特の風情を持った絵巻となったといえるだろう。この絵巻は風俗画としては少々もの足りないが、十二月分の主題を全部使い切って、十九世紀の江戸ならではの年中行事と名所を的確に取りあげているという点において、非常に完成度の高い「江戸月次風俗図」であるといえよう。

では、このように個性的で上質な「江都四時勝景図巻」はどのような背景から生まれて来たのであろうか。幸い冒頭から詳しく紹介してきたように、この絵巻の制作に関わってきた人々の事情は明るい。次に、この絵巻が誕生した背景をさぐっていききたいと思う。

2 制作背景

「江都四時勝景図巻」の制作にたずさわった人々を振り返ってみると、いずれも幕府に密接に関わる立場の人物か、当代一流の学者である。絵と詞書の筆者である狩野素川彰信が幕府の奥絵師の当主であるのをはじめとして⁽³⁾、松平定信と前田利幹は大名、とりわけ定信は老中首座までつとめた幕府の重鎮であり、市河米庵は江戸後期を代表する書家で幕府の儒臣の子、賀茂季鷹は京都から二十年ほど江戸に下っていた和歌・狂歌を得意とする国学者で、大田錦城は考証学と儒学で知られた学者である。そして定信が茶人としても知られていたように、彼らはいずれも高い教養と知識を身に付けた江戸の文化人であったことがわかる。

また素川の附記に書かれているように、本絵巻は〈森川氏〉の注文によって描かれたものである。制作された三年後の文政二年（一八一九）に、錦城が外箱蓋裏に書いた書付を読んでも「江都四時勝景図巻」が〈森川氏〉なる人物が所蔵していると書かれている。この森川氏とは、岡野智子氏の論考「酒井抱一下絵「蔓梅擬目白蒔絵軸盆」をめぐる――画家・蒔絵師と豪商の接点――」によれば、幕府の勘定所御用達も勤めた神田佐久間町の材木商森川家のことである⁽⁴⁾。

この絵巻は、幕府からも一目置かれていた豪商森川家のために、幕府奥絵師の素川が絵筆をふるい、当時最高の文化人たちが協力して制作したことがわかる。森川家の当主も、当然これらの人々と対等に交際できるだけの教養も富もある文化人であったことは間違いない。「江都四時勝景図巻」の質の良さ、品の良さは、そのような世界を出自とするもののみが持つ特徴であったといえよう。

このように「江都四時勝景図巻」が制作された環境がはっきりしてみると、大名行列と江戸城という、画題としては地味な行事が正月と十月に取りあげられた理由もわかる。巻頭に目出度いだけの正月風俗を持つてくるよりも元旦の登城風景を配した方が、彼らにとつてはより自然な選択であったのであろう。十月の玄猪の登城も、幕府の権威を表す行事として同様の思いで選択されたのかもしれない。もともと江戸の十月の月次絵として一番作例が多いのは商家を中心とした行事の恵比須講なので、豪商森川家発注の「月次風俗図」であれば恵比須講を画題とした方が相応しかったようにも思われる。しかしよく見てみると、正月は明らかに登城する時の様子を描

いているが、十月のものは行列が門に背を向けていることから、拝謁を終えた大名達の下城風景であることがわかる。さらに薄墨を用いて暗く沈むように屋根や樹木を描いていること、御門前の焚き火が赤々と燃え、高張り提灯があちこちに描かれている点などから、これが日暮れ時であることも理解できる。つまり十二ヶ月の中に単純にふたつも登城行事が描かれていたわけではなく、上巻にあたる乾巻では朝の登城風景が、下巻にあたる坤巻では夕闇せまる下城風景が描かれているということになる。登城行事が2回も入っているということについては、一見すると幕府行事に重きを置いたがための単調な選択とも思えるが、よく見れば対照的な条件を積み重ねた絶妙な構成だと理解できる。ここに無難な恵比須講ではなく玄猪の登城という行事を、しかも夕刻の下城風景という他に例の無い情景を描いた発想にこそ、この制作集団の持つ幕府への畏敬の念や、絵画制作に対する高度な企画力というものが遺憾なく発揮されていると理解するべきであろう。

さて、次に考えてみたいことは、このように江戸の上流社会に属する文化人たち、とりわけ幕府とは縁の深い人々が「江都四時勝景図巻」を制作するにあたり、どのような意識を持っていたかということである。

筆者はかつて「月次風俗図」には、へもうひとつの主題⁵⁾が見出せるといふ説を提出している。『月次風俗図』を制作するには、各月にいくつもある行事の中から、画題としてひとつの行事を選ぶ行為を十二ヶ月分行うことになるので、各月から行事を選ぶために

は自ずと作者独自の基準を持つことになる。つまりその選択基準の根拠が、その作者にとつてのへもうひとつの主題⁵⁾となるのである。さらに別稿において、この観点に立つてこの「江都四時勝景図巻」について少し考えたことがあるが、その時点での解釈は、十九世紀の江戸再認識と江戸賛美の時勢を受けて最も江戸らしい江戸を描いたものだろ、ということであった⁶⁾。十二ヶ月全て完全に江戸の行事と名所で埋め尽くされた「江都四時勝景図巻」に対し、今もこの解釈に異存は無い。しかしその場での主たる作業が「江戸月次風俗図」の収集と画題の分類作業とその傾向を検証するものであったため、本絵巻一点に対する細やかな理解が浅かったことは否めない。そこで今回もう一步踏み込んでみた結果、「江都四時勝景図巻」の制作意図、つまりへもうひとつの主題⁵⁾をリードした人物として、本絵巻の題辞を寄せた松平定信の存在に注意を払うべきだということに思い至った。

3 松平定信とその時代

先に十九世紀の江戸再認識の気運と「江都四時勝景図巻」について述べたが、これは同時期に、様々な地誌が編纂されたことにも関係している。ここで示唆に富んだ研究として取りあげたいのが、当時の地誌類に対する編纂作業の動静には、松平定信(一七六三〜一八一七)が深く関わっていると指摘した白井哲哉氏の研究である⁷⁾。同氏の説に従えば、編纂事業が積極的に進んだのは、定信が老中首座になった天明七年(一七八七)から寛政五年(一七九三)の時期、

そして寛政十一年（一七九九）に定信と心を通わせる松平信明（一七六三―一八一七）が老中首座になって以降と理解される。定信はこの期間、当然自らも江戸の地誌や幕府の歴史を学んできたに相違ない。そしてさらに文化年間半ばには、幕府直轄の昌平坂学問所において林述斎（一七六八―一八四一）を中心に再び編纂事業が活発に進められることとなったのである。うがった見方をすれば、九月の神田明神祭礼の場面で、遠景に神田明神の鳥居とともに湯島の聖堂の屋根が見えているのも、まさに当時、江戸を語る編纂事業がその地において熱心に展開していたことを暗示しているようにも受け止められる。

いずれにせよ、本絵巻が制作された時期は、定信を中心に長年進められてきた編纂事業の成果が充分蓄積され、その事業がさらなる展開を見せていたことがわかる。

さてここで改めて「江都四時勝景図巻」における特徴を思い返してみると、十二ヶ月分、全て正確に江戸の土地と行事を描いていること、詞書において取りあげた行事や場所の故事来歴に格調があり、丁寧に検証されていることが指摘できた。また内容も武家の行事、庶民の楽しみ、市中の風景、郊外の名所、と非常にバランスよく目配りの行き届いた選択となっていた。これらの点から本絵巻制作には、江戸の歴史や事情に詳しい人物、それも高度で幅広い知識を有する人物が関わっていたことが想定される。さらに先にも指摘したように、幕府の登城行事をふたつも入れているという「江戸月次風俗図」としては珍しい発想から、江戸という都市をバランス良く見

ることができるにしても、基本的には為政者側の人物であることは間違いないと思われる。これらのことを考えあわせると、「江都四時勝景図巻」の制作背景で手腕を奮ったのは、やはり長年地誌編纂という仕事を推し進めてきた松平定信ということになるのではないだろうか。この絵巻に関わった人物はいずれも幕府に親しい人物たちであるが、これほど壮大で緻密な構成の江戸絵巻のイメージを具体的に思い浮かべることができたのは、経験豊富な彼を置いて他には考えにくい。

松平定信が、「江都四時勝景図巻」のような江戸に対する賛美の念と考証的な視線を持った絵巻に対して、当絵巻の序を書いたように、何らかの立場で直接筆をとったことが他にあるのかどうかは浅学のため知らないが、定信が本絵巻に類する絵巻を所有していたことは知られている。鋏形蕙斎（一七六四―一八二四）による文化三年（一八〇六）制作「近世職人尺絵詞」と享和三年（一八〇三）の「東都繁昌図巻」がそうである。いずれも内田欽三氏による論考「鋏形蕙斎筆「江戸一目図屏風」の成立をめぐって」に詳しく検証されているのであるが、それらの特徴は「江戸四時勝景図巻」の本質部分と大変よく似通っている⁸⁰。たとえば前者は、当時江戸で暮らしていた人々の姿を活写したもので、多種多様な人々の姿が描かれており都市江戸の賑わい振りがよくわかる。しかも詞書は故事来歴、考証を中心とした丁寧なものである。内田氏が表現するところの「江戸自慢、現在の肯定」という姿勢が決定的である。後者については、三つ取りあげられた繁昌の場面が、飛鳥山の花見、日本

橋の魚河岸、両国橋の花火、という江戸の名所であり且つ代表的な季節の風物詩を描いた場面となっている。やはり当絵巻も、このような画題選択とともに、題名に「繁昌」と銘打った点に共通する姿勢を見出すことができる。さらに詞書も同様の観点に立っていることは、内田氏も指摘している通りである。

しかしこの時代、このような傾向が定信ら為政者の側にのみ生じたわけではない。定信の寛政の改革によって昌平坂学問所が誕生した翌年の寛政十年（一七九八）、江戸における最高の地誌『江戸名所図会』の刊行許可が、まさに民間人である神田雉子町の草分名主斎藤幸雄（一七三七～一七九九）に下りている⁽⁹⁾。しかも挿絵師は、当初予定されていたのが浮世絵師の北尾重政（一七三九～一八二〇）、最終的に全挿絵を担ったのは流派に属することも無かった町絵師の長谷川雪旦（一七七八～一八四三）であった⁽¹⁰⁾。このような町絵師と協力しながらの斎藤家三代の編纂作業の結果、ようやく刊行にたどりついた孫の斎藤幸成（月岑）は、その凡例に「東都盛大の繁栄なる事を知らしめ」と高らかに述べている。この姿勢は定信らと全く同じである。しかしこの『江戸名所図会』が目指すものは鈴木章生氏が既に指摘している通り、「将軍のお膝元という社会秩序を認めつつ、そこに栄えた町人の町、江戸の町の姿そのもの」であり、「江戸町人の目や視点から見た江戸の繁栄を提示」することであったのである⁽¹¹⁾。つまり十八世紀末から十九世紀初頭にかけて展開した江戸の再認識、江戸の賛美という意識と、都市江戸に対する考証、そして正確な観察眼をもとにした絵画表現の追求は、

幕府側にも町人側にも同時に発生した、その時代全体を覆うものであったことを忘れてはなるまい。「江戸四時勝景図巻」の制作は定信の存在によるところが大きいは確かなことと考えるが、やはりそれと同時に、当絵巻の誕生をより大きな時代の趨勢の中でとらえることも必要であろう。

「江戸四時勝景図巻」の〈もうひとつの主題〉は何であろうか。それは、江戸再認識と江戸賛美の時勢の中で、松平定信を代表とする江戸幕府に近い上流文化人たちが、最も望ましいと思う江戸の姿を描くことであつたに違いない。また鍬形蕙斎が、定信やその周辺人物達との密接な関係の中で制作した江戸関連絵巻の存在を思うとき、「江戸月次風俗図」にして「江戸名所絵」という重層的な画題を得て、江戸の名所・旧跡、当時の風俗、そして四季折々の行事と暮らしぶりを見事に描ききつたこの「江戸四時勝景図巻」は、まさに定信好みの江戸関連絵巻の集大成だと理解できよう。

【註】

(1) 小澤弘「江戸時代を語る・雷門江戸ばなし 続編(六四)——『江戸四時勝景図巻』について」(『浅草寺』第四一〇号 浅草寺教化部 一九九三)。

・岡野智子「酒井抱一下絵「蔓梅擬目白蒔絵軸盆」をめぐる——画家・蒔絵師と豪商の接点——」(『東京都江戸東京博物館研究報告』第一号 江戸東京博物館 一九九五)。

- (2) 拙稿「江戸「月次風俗図」研究」(『國華』第一二四三号 國華社 一九九九)。
- (3) 浅草猿屋町代地狩野家の当主。号は素川、大玄斎。『古画備考』(浅岡興禎 思文閣 一九八三)によると、はじめ「彰信」と款し、文化十一年(二八一四)五十歳以降「章信」に改めたというが、本絵巻は文化十三年の作でありながら「彰信」と署名している。拙論においては署名を尊重し、筆者名を「彰信」とした。
- (4) 註(1) 論考参照。
- (5) 拙稿「江戸時代「月次風俗図」の主題について―江戸東京博物館蔵「月次風俗図」巻を中心に―」(『東京都江戸東京博物館研究報告』第一号 江戸東京博物館 一九九五)。
- (6) 註(2) 論考参照。
- (7) 白井哲哉「江戸幕府の書物編纂と寛政改革」(『日本歴史』第五六三号 日本歴史学会 一九九五)。
- (8) 内田欽三「歙形蕙齋筆「江戸一目図屏風」の成立をめぐって」(『サントリー美術館論集』三号 サントリー美術館 一九八九)。
- (9) 『江戸名所図会』は、その後幸雄の孫である幸成(月岑)が完成させ、天保五年(一八三四)に前編が、天保七年に後編が刊行された。
- (10) 『江戸名所図会』の挿絵は北尾重政ということでも許可も下りていたが、重政は編纂作業の途中に八十一歳で没している。刊行許可が下りた段階で既に重政は五十九歳であったから、
- ある時期において健康にでも障害が生じて雪旦に挿絵師の座を譲ったものと考えられる。引き継いだ雪旦は、『江戸名所図会』刊行と同時に、その緻密で正確な表現による名所や風俗の挿絵が高い評価を得て、江戸名所絵の名手として名をあげることとなった。
- (11) 鈴木章生『江戸の名所と都市文化』(吉川弘文館 二〇〇二) 二六〇頁二行目、二六三頁十五頁より。